

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の本当のすがたは神の子である

親の心は子供に影響する

子供の教育ということは本当は大人の教育なのであります。だから、私は子供の教育を説く前に先ず大人に説く倫理を以てしたのであります。子を良くするには先ず親を教育しなければならぬ。それ程親の心は子に影響を与えるのであります。(新編『生命の真相』第22巻13頁)

子供の悪いところばかりが目につく親の心は

多くの子供たちは、親がまちがった心の波を起こし、

まちがった言葉の波を起こしているために非常に損なわ

れているのであります。多くの人たちは、子供を愛する

あまりに悪しきことばかりを見つけて、「お前はここが

わるいのだ」ということを始終言うのであります。そう

言われるとその子供は萎縮してしまいます。そういう子

供は、たとい勉強は辛うじてよくできたにしましても、

大いに伸びるといふことはできないのであります。「勉

強しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、や

むをえず「お前はそんなことではできないから勉強せ

よ」と言うのだという人があるかもしれませぬけれど

も、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うとい

くら勉強してもかえって心に憶えないのであります。こ

れはまたおかしい現象ではありますが、原理は簡単です。

「勉強せよ、勉強せよ」と言うような親は、子供に対してどういう心の態度をとっているかといえますと、「前はできがわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。できるに定まっておれば、「勉強せよ」とは申しません。「できがわるい」と信じているから、「勉強しろ、勉強しろ」とこう言うのであります。

〔生命の實相〕頭注版第30巻12～13頁

## 「心の綱」で子供を縛ってはならない

親の利己主義、親の名誉心、親の虚栄心によって、子供をこういう具合にしなければ世間体が悪いという親の「迷い心」の綱によって、その子供を縛ってしまうということは、神の子たる「子供」を冒瀆することになるのであります。「お前世ひとも学校へ入学しなければならぬ」「こういふふうな「ねばならぬ」の心の綱で縛ってしまう。「心」というものは一つの波でありますから、親がそういう心持を持っておりますと、その精

神波動が波及して、「心の綱」で相手を縛ってしまうのであります。子供を「心の綱」で縛ってしまいますと、子供はなんとなしにその縛りに精神的窮屈さを感じ、その縛りから解かれたいという気持が起こってくるのであります。親の「心の綱」の縛りから解かれたいという気持が子供に起こると、その子供の日常の操行が変わってくる。乱暴になったり、落ち着きがなくなったりするのであります。

〔生命の實相〕頭注版第30巻36～37頁

## 子供の実相を信じて拝む

たいていの人は、「心の綱」などは肉眼では見えないのでありますから、「別段わたしは自分の家の子供を縛ったことはありません」などと言われるかもしれませんが、多くの親たちはたいてい、子供を自分の「心の綱」でがんにがらめに縛りつけておるのであります、そのために反動として子供の品行が悪くなり操行が悪くなるというようになっているのであり

ます。(中略)

さて、京都の石川さんの坊っちゃんも一昨年その坊っちゃんが一高の理科を受けられたのですが、<sup>すべ</sup>返られたけれども、少しもお母様はおかこち(嘆いて不平をいうこと)にならなかった。そうして実相を見て、「うちの子供は神の子であるから入学しても入学しなくとも少しも価値が相違しない。昨日の子供は今日の子供と同じ価値だ」と喜んでいられたのであります。実相というと、<sup>じつ</sup>実の相、人間の本当の相を言うのであります。(中略)人間には<sup>かり</sup>仮の相と本当の相とがあるのです。仮の相というのは今申しましたように、親が心で縛っているとそれに反抗するために、あるいは<sup>そうこう</sup>操行がわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影として出てくる、これが<sup>かり</sup>仮の相であります。本来その子の操行がわるいのも学業の成績が悪いのでもないであります。人間の本来の相、<sup>すがた</sup>本当の相は神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相、その<sup>すがた</sup>本当の相を見てそれを<sup>て</sup>拝み出すようにしますと——<sup>て</sup>拝むといっても、あながち<sup>て</sup>掌を合わさなくても

むろんよいのですけれども——心で子供を<sup>て</sup>拝む——「うちの子供は本当に神の子であって立派な子である。放っておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で<sup>て</sup>拝むのであります。この石川さんの奥さんの子供をよく信じておられるのはわたしは常に感心させられるのであります。一度、一高の入学試験に失敗せられましたから、その坊っちゃんが、時々勉強しないようなこともあられたようでしたけれども、「うちの子は決してまちはないのだ。神の子だから決してまちはないのだ」という大きな信念を持って子供を<sup>て</sup>拝んでおられた。その大きな信念を持っておられました結果、その翌年にはチャンと一高へ入学せられたのであります。

『生命の實相』頭注版第30巻38～40頁

